今も街見守る

築城図屏風（名古屋市博物館提供）

名古屋城調査研究センター

副所長　村木　誠さん

明確な「本質的価値」

文化財保護行政では、遺跡の「本質的価値」が問われるが、特別史跡名古屋城の本質的価値は明確だ。「御三家筆頭の尾張徳川家の居城」「現存する遺構や史資料により築城期からの変遷がたどれる」「都市形成のきっかけ」。この三つを本質的価値と見ている。

当時の築城の様子を描いた屏風が名古屋市博物館にある。駿府城の様子とされ、大きな石を運んだり、栗石をもっこや天秤棒で運んだりしている様子が描かれている。活気にあふれ、祭りのような雰囲気だったことが分かる。

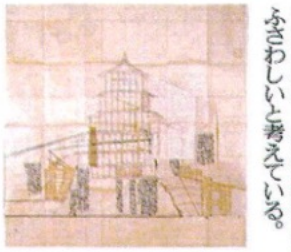
名古屋城の本質的価値である石垣は総延長9キロ。石垣は本質的価値をなす要素の一つだ。大天守台の北面石垣を例に話すが、右側は比較的きれいに並び、石同士も密着して詰石がない。しかし、左下のあたりは整っておらず、すき間には小さな詰石がある。

江戸中期の宝暦2～5年（1752～55）に、天守台石垣を修理したことが分かっている。北西の石垣が孕み出し、天守本体も傾いたため、天守の一部解体と石垣の修理が行われた。図面が残っているが、天守を綱で引っ張り持ち上げ、下の石垣を修理する大規模なものだった。名古屋城にはこのような積み直しが分かるところが何か所かある。

現況を調査したうえで石垣保存のために必要な対応策を講じている。何でも手を入れるのではなく、本当に危ないところ、必要なところを選び出している。今は本丸東側の搦手馬出の石垣を修復している。

名古屋城の現天守閣は、外観が正確に復元され、特別史跡の本質的価値の理解を促進する要素といえる。天守がどのような背景で造られたのか。焼失から4か月後、城郭研究者で名古屋工業大の教授を務めた城戸久はこう述べている。「大東亜戦争で焼失したことそれ自体が城の歴史だ」

一方、商工会議所と観光協会は昭和22年に再建を陳情した。観光振興が目的の一つだった。様々な議論を経て、昭和32年2月に現状変更申請を提出、2年後の10月に鉄骨鉄筋コンクリートの天守閣が完成した。


❶天守北面の石垣。左の部分に比べて右は築石がきちんと並んでいる　❷宝暦の大修理の絵図（名古屋城総合事務所蔵）

必ずしも近世の城そのものの理解促進を主たる目的としていたわけではなく、文化的な施設を作りたい、観光にも資するものにしたいとの目的で作られた。

再建から60年以上。耐震補強するか、解体して木造復元するか。名古屋市は木造復元する方針で計画を進めている。今の天守閣もこの間、役割を果たし、価値あるものだが、「本質的価値の理解の促進」という特別史跡名古屋城の整備目的に鑑み、木造復元がよりふさわしいと考えている。

名古屋市博物館に名古屋城の堀から出土したと言われている銅鐸がある。本当かどうか、いつ出土したかも分からないが、名古屋城の堀から出土したといった方が由緒正しく、ありがたみが増すと考えたのだろう。

銅鐸は弥生時代後期のもの。古墳時代に向けた「戦いの時代」でもあった。大和政権に向けてまとまっていく時期。それに伴う戦いがあったと言われ、戦国時代と似ている。台地の端に位置する名古屋城周辺でも三の丸遺跡などから弥生時代の遺物が出土している。環濠集落があって、その集落に銅鐸があったのかも知れない。

銅鐸は直接、名古屋城の本質的価値と関わらない可能性が高い。しかし、この地域の歴史、あるいは日本全体の歴史を長い目で見るという点で、名古屋城の堀から出土したとの言い伝えを持つこの銅鐸のことを考えてみる意義はあるのではないか。

主査　原　史彦さん

名古屋城　資料豊か

名古屋城は、他の城よりもはるかに多くの資料が残っている稀有な城だ。城そのものが昭和20年の終戦直前まで残っていたため、多くの建物は記録に基づいて再現できる。

江戸時代の景観平面図は築城時のものを含め50種以上ある。立面図も15種以上、材料調達などの文献記録は20種以上。さらに、焼失前に撮影された写真が2000枚以上、昭和実測図といわれる詳細な図面や修理の記録が400枚以上、もしかしたらもっとあるかも知れない。

残された資料から、天守台の回りの設計変更が分かる。大工頭を務めた中井家に残る「なこや御城惣指図」では、大天守の北西にも小天守が計画されていた。しかし、蓬左文庫に残る「尾陽名護屋城図」では建物はなく、石垣や土塁で囲んだ桝形になった。

さらに、「名古屋御城石垣絵図」では桝形がなく、地続きの空間に。最後は堀になったわけだが、短期間に何度も設計変更したことが分かる。こうした明確な設計変更が分かるのは名古屋城だけだ。

家康の重臣・安藤重信が大工頭に宛てた書状には「天守内を住居とする必要はない」と記され、2か月後に駿府年寄と呼ばれた重臣が連名で「天守を早く建てろ。御家（本丸御殿）は後回しにしろ」という書状を送っている。本丸御殿は天守の2年後に完成した。

名古屋城の百科事典ともいえる「金城温古録」は、奥村得義と定の親子が編さんした。得義は尾張藩掃除中間頭で7石2人扶持。身分はそれほど高くはなかったが、文政4年（1821）から城の調査を始めた。40年後に4編31冊の清書本が完成した。得義はその翌年になくなったが、養子の定が後を引き継ぎ、明治35年（1902）に全10編64巻が完成した。明治維新による中断を含め通算80年かかって完成させた。

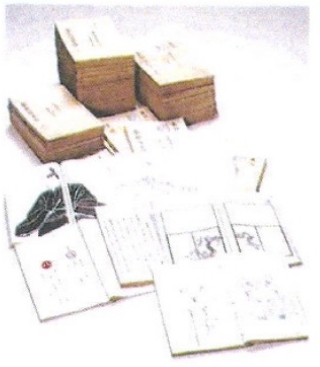
さらに出色なのは昭和実測図だ。名古屋城は明治維新後、陸軍から宮内省に移管され、天皇家の名古屋離宮となり、昭和5年、名古屋市に下賜された。城郭では初の国宝指定を受け、同7年から18年にかけて詳細な調査が行われた。

文部省宗教局保存課の技術員が実測し、完成したのは終戦後の昭和27年（1952）だった。すでに、天守も本丸御殿も焼失していたが、調査結果を残そうという技術者の魂を感じる。建物類の図面は280枚、50枚近い修理設計図面、金具などの拓本貼付図21枚、技術員のメモ帳ともいえる実測野帳、調帳もある。

古写真が多いのも名古屋城の特徴だ。城として稼働していた時代の写真が200枚現存している。尾張徳川家14代藩主の慶勝が撮影したもので、三之丸御屋形などのパノラマ写真もあり、平面図では分からない屋根の構造などが分かる。ただ、天守や清須櫓などは外観だけ。藩主といえども将軍の宿館には自由に出入りできなかったのだろう。

明治以降の写真も豊富に残っている。東京帝室博物館（現東京国立博物館）などが撮影したガラス乾板写真が1500枚ほど残っている。天守内部の柱の太さや木材がどのように組まれていたか分かる。

本丸御殿上洛殿の欄間などパーツごとの写真も豊富に残っている。だから、不可能と思われていた本丸御殿も忠実に再建できた。名古屋城は空襲による焼失前の姿を忠実に再現できる稀有な城といえる。



写真上から時計回り
金鯱が取り外された大天守。明治初め、金鯱は宮内省に献納された（名古屋城総合事務所蔵）、80年かけて編さんされた「金城温古録」（名古屋市蓬左文庫蔵）、ガラス乾板写真で残る天守4階の階段

歴史学べる「城宝館」

昨年11月、名古屋城に新たな施設がオープンした。国の重要文化財に指定されている本丸御殿障壁画など名古屋城所蔵の「宝」を展示、収蔵するとともに、名古屋城の歴史や江戸期の文化などの「情報」を発信する拠点として、「西の丸御蔵城宝館」と命名された＝写真＝。

展示室、歴史情報ルーム、収蔵庫からなり、展示室では企画展も開催する。開館時間は午前9時～午後4時。入館は無料だが名古屋城観覧料（大人500円）が必要。